



- 話に遊び 輪を結び 座に集う -

第六回 民話ゆいわ座 資料

『民話のなかのじじとばば』

〜一粒の豆をめぐって〜

―わたしたちが聞いた語りの中から―

— もくじ —

- 一 「豆と地蔵さま」 話・大友かのえさん（大正九年～平成一〇年）…………… 1頁
- 二 「豆ごと地蔵さま」 話・砂金範男さん（明治四四年～平成四年）…………… 4頁
- 三 「地蔵さんに食われた豆」 話・小松仁三郎さん（昭和七年～平成二八年）…………… 7頁
- 四 「鼠と豆」^{ねずみ} 話・曾根つき子さん（大正一二年生）…………… 17頁
- 五 「ネズミ浄土」 話・永浦誠喜さん（明治四二年生～平成一四年）…………… 20頁
- 六 「一粒の豆っこ」^{つぶ} 話・伊藤正子さん（大正一五年生～平成二九年）…………… 24頁
- 七 「豆っこ話」 話・煤原村男さん（大正八年生～平成二二年）…………… 26頁
- 八 「豆っこないでばやあ」 話・小松仁三郎さん…………… 27頁

一 豆と地藏さま

むがす、あつたづおんなあ、ほれ。

ばんつあん、「豆ぶちおわって、掃きかたしたれば、豆ひとつぶ、ころがっていたんだと。」

「あら、いだましやあ」

って、豆さ追っかけでいったんだと、ほれ。

ほしたら、豆、鼠穴ねずみあなさ入っていったんだと。ばんつあんが、追っかけで、鼠穴さ入っていったれば、向こうのほう明るく開けてで、そこさ地藏さま、立ってござったんだと。

「地藏さま、地藏さま。豆、ころんできえんかったべか」

「ああ、ころんできた。そこどこにあっから持っていげ。ひとつぶばりの豆、よく大切にするなあ」

ってばんつあん、地藏さまにほめられたんだって。

「んで、ばんつあん、いいこと教えっから、おれのいうこと聞け。」

今晚、ござ博打ぶち来っから、鶏にわとりのまねしろ。とにかく、今晚、来い」

そういわれて、ばんつあん、家さ帰ってきたんだと。

そして夜になつてから、また、行ったんだと。そうしたつけ、地藏さまに、

「隠れでいなげねから、おれの膝かぶさ、あがれ
っていわれた。」

「だれ、地藏さまの膝かぶさ、尊とつてくてあがられえん
つったんだと。」

「いいから、そんなこと語かたんねで、あがれ
っていわれた。ばんつあんが膝かぶさあがると、

「んで、こんどは、肩かたさあがれ」
「だあれ、膝かぶでさえあがれねえの、肩まであがっていわ

れても、とつても尊とつてくてあがられえん」
「そんなこと語かたんねで。いいがら、おれ、あがれっていうんだ

がら、あがれ」

したっけ、こんどは、

「頭さあがれ」

「なんだがすけな、地藏さまの頭まで、とつてもあがられえん」
つったんだと。

「そんなこと、語んねで、いいからあがれ」

っていわれて、頭さあがって、待ってたんだと。

そうしたっけ、博打ぶち、地藏さまのお堂さま来てね、博打は
じまったんだと。

でっちんじよろ 猫のくそ

でっちんじよろ 猫のくそ

そうして、ほれ、夜もふけできたからってね、地藏さま、ば
んつあんのどご、ちくつと突いたんだと。そのとき、ばんつあ
ん、地藏さまにいわれたから、

コケコッコー

つて、^{にわとり}鶏の鳴き声出したんだと。

「ありや、一番鶏、鳴いたでやは」

つて、^{ばくち}博打ぶち、いったど。

して、またしばらく、

でっちんじよろ 猫のくそ

でっちんじよろ 猫のくそ

つて、博打してたんだと。

やんべえころになつてから、またちくつと突かれたんだと。
したから、ばんつあん、また鳴いだと。

コケコッコー

「あら、二番鶏^{どり}だは」

しばらくして、また突かれたんだと。ばんつあん、また、

コケコッコー

つて鳴いたんだと。

「あららら、三番鶏^{どり}、鳴いだ。こんなにはやく、夜明けるっつ

「ごとあんべっっちゃや」

「って、まあず、博打ぶちたち、銭、かたづけしないで出ていったんだと。そうしたつけ、地蔵さま、

「残った銭、おまえさけっから、持っていけ」

「つつたんで、もらって帰ってきたんだと。」

「火つこたもれやあ」

「って、隣のばんつあん、来たんだと。」

「なんだや、たまげで金持ちになったや。なじよなわけだが、おれさ教えろ」

「つつんで、

「こついうわけで、豆、ころんでいったの、追って行って、拾ってきたら、こいなんだ」

「つつた。隣のばんつあん、

「おれも、まねっこする」

「って、ころんでいくもしねえ豆っこ、わざい穴さ入れでやって、

「追っかけでいったと。」

「したつけ、やっぱり、地蔵さま、立ってござったと。」

「隣のばんつあん、

「膝かぶさあがれ」

「ともいわれねえ。」

「肩さあがれ」

「ともいわれねえ。」

「頭さもあがれ」

「ともいわれねえの、ああ、ずかずかあがって、そして、待ってたんだと。」

「待ってるうちに、博打ぶちきて、博打はじまったと。隣のば

「んつあん、地蔵さま、合図もなにもしねえのに、

「コケコッコー

「って、鶏のまねして鳴いたんだと。」

「時でもないのに鳴いだから、

「なあんだ、きのうもおがしいと思ったけ、あいつ、うそ鶏だ」

って、博打ぶちどもに見つけられで、

「きのうも、おらどご、ばがにしたべ」

って、隣のばんつあん、はだかれで、銭じえにもうけるどころか、

ほうほうのていで、帰ってきたんだとやあ。

こんで よんつこ さげたどやは

みやぎ民話の会叢書第三集

「大友かのえの昔語り むがす あったづおんな ほれ

—宮城県志田郡二本木町—」より

二 豆ごと地藏さま

むがーしむがし。

じんつあまとばんつあま、あつたんだと。ばんつあま、庭掃はいたら、豆まめごとつ、ころつと転がってきた。

ばんつあまが拾うべとしたら、ころころころつと転がって、ネズミ穴へえさ入ってしまった。

「あらあら、いだましやあ」

ばんつあま言ったら、じんつあま、

「おれ、取ってくつから」

って、ネズミ穴さくぐっていったんだと。

ネズミ穴、深くて、どこまでも続いてんだとや。じんつあま、いっしよけんめい掘っていったと。ずうつと掘りながらいったら、地藏さま、いたんだと。

「なしてこいなどこさ来たや」

「豆こ、ひとつ落としたから、探しさ来した」

「んだら、俺の膝ひざさ上げれ」

「だれ、もったいねくて上げられねえ」

「いいがら上げれ、いいがら上げれ」

地藏さま言うから、上がったんだと。

したら、

「肩かたさ上げれ」

って言うんだと。

「もったいねくて、上げられねえ」

「いいから肩かたさ上げれ。今度は頭かぶさ上げれ」

「膝ひざさ上げるのももったいねえのに、頭かぶさなんか、ことせう上

がられねえ」

「いいがら上げれ」

言われて上がったれば

「いこと教えっから」

って言わったんだと。

「そこさ、篋かみと、二尺ぐれえの竹こ、あつぺ。今晚、その二

ワトリ小屋さ、博打ばくちぶち来る。みんなで銭ぜに出して博打ばくちぶつてか

ら、パタパタつと篋かみはたいて、コケコッコーってニワトリ

の真似まねしろ」

って教えらったんだと。

待っていたれば、博打ばくちぶち何人も来て、博打ばくちぶちはじまった。

銭ぜにどつさり出してあんだと。

じんつあま、いあんべなころ（ちようどいいころ）、ニワト

リが羽はばたきするみてえに篋かみを。パタパタつとはたいて、

「コケコッコー」

ってトキ作つくったんだと。

したら博打ばくちぶち、

「なんだ、今日は。夜お明けんの早はえな。役人やくにんさま来て、ごっしや

がれつと（しかられるぞ）」

って、銭置いて、逃げてしまったと。

その銭集めて、家さ来て、ばんつあまと語ったんだと。

「ほんで、何もねえから、赤え衣裳あけいしよ（晴れ着）など買ってくる

べえ」

って町さ行って、赤え衣裳あけいしよ買ってきて、着てたんだと。

隣のばんつあま聞きつけて、

「なして、この家で、赤え衣裳あけいしよ着てんのや」

って言うから、語ったんだと。

「そんで、おら家いでも地藏さまさ行って、こいなふうにすんべ

え」

って家のじんつあまと相談して、前庭ささっぱと豆ちらかして、

掃きかたしたんだと。

したらそのうちのひとつ、やっぱりネズミ穴さ入ってったん

だと。ばんつあまに尻けつはたかれて、隣のじんつあま、しゃ

あねくて（仕方なく）掘っていったれば、やっぱり地藏さまいた。

上がれとも言われねえのに膝かぶさ上がる、上がれとも言わ

れねえのに肩さ上がって、頭さ上がったんだと。そして、

「地藏さま地藏さま、博打ぶち、どこにいますべがね」

って聞いたれば、地藏さま、

「あそこさ来っから、ニワトリ小屋さ上がってて、銭出したら

ば蓑。パタパタはたいて、トキ作れ」

って教えたんだと。

んで、隣のじんつあま、ニワトリ小屋さ上がって待ってた

んだと。

博打ぶち来て銭出したから、さっそくパタパタやったんだと。

したれば博打ぶちだち、

「なんだやあ、今日はあんまり早はえな。まだ夜お明けるくせえ

でねえんでねえか」

じんつあま、ほんでわがんねと思って、またも蓑はたいてパ

タパタってやったら、

「なんだ、なんだ。おがしねえやづ、いた」

って言いはだった（言いはじまった）んだと。

じんつあま、びつくりしてね。押さえらってから大変だから、板っこかぶって逃げつとこしたら、釘あるの知らねえで、なんだもかんだも、そいづさ急所ひっかけてしまった。

「ばばに騙だまさつて、おう、あぶねぐ死ぬどごだった」

つて、急所押さえて、はあ、命からがら逃げてきたと。

んだがら人の真似したつて、銭もうけなどできないんだと。

こんで、えんつこもんつこが さげだんだと

みやぎ民話の会叢書第八集

「土地に根ざした民話 砂金範男の語り

千葉直次の語り」より

三 地藏さんに食われた豆

むかーし、あつたづでや。

えらく情け深いじんつあんとばんつあんがおつたとしや。

お正月が来たつうのに、その年は不作でなんも穫れなかつたつうんだ。

ばんつあんが寝てて、

「じんつあんやあ、今年はお供そなえするものなんにもないなあ」
つて言つたと。じんつあんが、

「ばんつあんや、裏の山から穫れたあの豆まめがら殻や、あいづをた
たいてみたら、お供えするぐらいの豆つこ、のこっているんで
ないか」

つて言つたつうんだ。

つぎの朝、暗いうちに起きて、二人でいっしょけんめ豆殻た
たきはじまつたと。

そうしたら、うんと実の入った大きい豆がぴよんとひとつ、跳びだしてきたつおん。

じんつあんが、それ見て、

「ばんつあんな、それ、えらい豆ころげていった。逃がすな」
って言ったつんだ。

ばんつあんなが、

「ああ、いたましい。いたましい」

と、追いかけていったら、庭のすまっこのネズミ穴さ、ぼたん
と入って行ってしまったつもな。

ばんつあんなが、がっかりして、

「じんつあんな、ネズミ穴さ逃げられてしまったやあ」

って言ったと。

じんつあんなが、

「くやしいな。したら、薪割るとき使う手斧で掘ってみっから」
って、手斧で、どンドン、どンドン、ネズミ穴を掘っていったと。

ああ、いっしょけんめ掘って掘って、掘りぬいて、どこまで
も行ったつんだ。

そしたら、広い広い原っぱさ出てしまったつもな。

じんつあんな、びっくりして、

「こんな広い原っぱ、なんぼさがしても見つかんね」
って、辺りをぐるぐる見まわしたと。

遠くのほうの原っぱの真ん中に、お地藏さんが立っていたと。

じんつあんながお地藏さんのところさ行って、

「お地藏さん、お地藏さん、この辺さ大きい豆ころがってこな
がったすか」

って聞いたんだって。お地藏さん、なんにも言わないで下見て
いたと。

「お地藏さんさ話したってわかんねべけんども、今年は不作で
なにも穫れなかった。お正月来っから、お供えしなくてわかん
ねと思っって、豆たたいたら、一番大きな豆がころげてネズミ穴

さ落ちた。そいつを追っかけてきたら、この原っぱさ来てしまっ
た。お地藏さん見なかったべかな」

って、またも聞いたつもな。

お地藏さんが、そいつを聞いて、

「さつきな、どつからともなく、えらい豆ころげてきて、おれ
の膝ひざんところに来たんだもな。このごろ、こんな大きおっなうまそ
うな豆、見たことないし、辺り見たれば、だれもない。ほんで、
これ、おれさお供えしたんだと思つて、だまって食つてしまっ
た。えらくうまい豆だったと。じんつあん、悪がった。だまっ
て食つて、悪がった」

って言ったつんだと。

じんつあん、

「しかたなかんべ。お地藏さんが食つたんだらいいよ。ばんつあ
んに、お地藏さんが食つて喜んでいたって教えられるんだか
ら」

って言ったんだとしゃ。

お地藏さんは、そいつ聞いて、

「じんつあんや、ちょっとおれの膝ひざさ乗つかつてみる」

って言ったつもな。

じんつあんがびっくりして、

「ああ、とんでもねえ。お地藏さんの膝ひざさんんど、もったいな
くて上がらんね」

って言ったど。したら、お地藏さんが、

「いいからじんつあん、ちょっとでいいから、乗ってみろ」

って言ったつうんだなあ。

「んで、お地藏さんの言つとおり、ちょっとだけな」

って、お地藏さんの膝ひざの上さ、ちょこんと乗ってみたと。

したら、お地藏さんが、

「背中さまわってみろ」

って言ったつもな。

「ああ、だめだ、だめだ。お地藏さん、膝さ乗るぶりでももつたない。背中さなんぞ、とつてもまわらんねえ」

って言ったと。

「そんなこと言わないで、じんつあん、おれの言うことも聞いてやあ、背中さちよつと乗って見ろ」

って、お地藏さんが言ったつおん。

せつかく言われたんで、じんつあん、

「んで、ちよつとだけ、お地藏さんに乗ってみっからね」

って、背中にまわって、よいしょと乗っかってみたんだと。

したら、お地藏さんが、

「もうひとつだけな。首っこ乗り（肩車になって乗ること）してみる。がんばって上がってみろ」

って、また言ったづもな。じんつあんがびっくりして、

「ああ、そいつは無理だ、無理だ。どこにお地藏さんの頭さ手かけられるべや。なんぼしたって上がらんね」

って言ったんだって。お地藏さんが、

「いいから、今日は特別だから上がってみろ。なんぼしたって上がってみろ。ちよつとでいいから、上がってみろ」

って、また言ったと。

「んで、ごめんなすてもらうつからね」

って、じんつあんが、お地藏さんの首たまさ、

「よいしょ」

とかじりついて、首っこ乗りしてみたつうんだ。

したら、お地藏さんが、

「じんつあんや、うんと遠くまで見えつかあ」

って聞いたづもな。

したら、じんつあんが、

「うん、見える、見える、どこまでも見える。えらく高いところさ上ったから」

って言ったって。

「うんと向こうに、大きな大きな家、見えないか」

「うん、見える、見える。えらく向こうだなあ」

「あの家さなあ、晚ばんげまでかかるけんども、なんぼ疲れても行ってみる。夜になると、とても楽しいことばかりあるぞ」

じんつあんが、

「んで、お地藏さんの言うとおりに行ってみっから」

って言ったたら、お地藏さんは、

「ころあい見て、ニワトリの真ま似ねしろよ」

って、じんつあんに箕みを持たせて、なにやらいっしょけんめ教

えたんだとや。

じんつあん、言われたとおりにいっしょけんめ歩いていって、

暗くなるころまでかかったら、大おっきな大おっきなだれもない家さ
着いたつうんだ。

じんつあんは、お地藏さんに言われたとおり、だまってかく
れていたと。

そしたら、どっからともなく、

ほほー、ほほほほー

って、えらくにぎわしい音してきたんだつおん。

「なんだ、これ。暗くなってから、いっぱい人、集まってきたなあ。
なにあんだべ」

って、じんつあん見ていたつうんだ。

そうしたら、赤おか鬼おただの青おお鬼おただのいっぱい集まってきた、

「ああ、寒い寒い。お正月になったのになや。火っこばり(火だけ)

でもたけっちゃや」

って、どんだん火たいて、

「酒っこでも飲むべっちゃや」

って、みんなしてゆかいになって、今度は唄っこなんどもうた
う鬼も出てきたっけど。

じんつあん、なにはじまんだべって思って、そいづ見ていた
んだって。したら、

「お正月だからや、景気よく、ひとつ勢いつけろっちゃ」

って、鬼ども、大判小判ばらばら出して、

「負けたどや」

「勝ったどや」

って、ぜに銭のやりとりはじめたんだって。

じんつあん、そいづ見ていたが、いっぱい銭ならんだころになつたら、

バタバタ バタバタ

と、箕をたたいて、

コケコッコー

って、ニワトリの真似はじめたつもな。

鬼ども、そいづ聞いて、

「ありゃ、今日の一番どり鶏、いつもより早く鳴いたんでないが」

って言ったど。したれば、

「いい、まだ夜明けないから、急げ、急げ」

って、また銭ばらばらと出してはじまったつうんだ。

じんつあん、またも、

バタバタ バタバタ

と、ニワトリのはばたく音真似して、

コケコッコー

って、ニワトリの鳴く真似したんだと。

したら、鬼ども、びっくりして、

「夜明けて来つど。早く逃げろ」

と、銭もなにもみんなぶん投げて、どんどんと行ってしまったつて。

あわてて、自在じざいかぎ鉤さ鼻などひっかけて、ふつとんでいく鬼も

いだったど。じんつあん、おかしいけんども、がまんしていた

んだと。

そのうち明るくなってきたつもなあ。

じんつあん、炉端ろばたさ、ばらばらといっぱい落ちていた銭をひ

ろいあつめて、お地蔵さんとこさ行つて、

「お地蔵さんに言われたとおりに、赤鬼青鬼が来たところで、ニワトリの真似したら、銭いっぱい忘れていったから、こんなに集めてきた。今日は、お地蔵さんのとこさ、みなお供えしていくからわ」

つて言つたと。

お地蔵さんは、にこにこ笑いながら、

「じんつあんや、きのう、じんつあんの豆食べて悪かった。正月来たからな、ばんつあんさ、お土産にその金ば持つていけ。

いい正月するように」

つて言つたづもな。

じんつあん、えらく喜んで、ネズミ穴こぼ、

「よいしょ、よいしょ」

と、銭こいっぱい入った袋を背負つて、もどつてきたつんだなあ。

じんつあん、ばんつあんにこれこれこついうわけだつて語つて、

「なあ、ばんつあんや、なんぼおら家貧乏でも、こんなに宝を見つけたんだから、隣の人、みんな呼んできてや、お正月だもの、お祭りすつぺ」

つてなつたと。

ばんつあんが、

「おら家貧乏だから、今までさつぱり呼ばらつたことない。んだから呼ぶことない」

つて言つたんだつて。

したれば、じんつあんが、

「そんなこと言わないでや。今年は不作で、みんな貧乏してるんだから、お地蔵さんにもらつたものだもの、みんなさ分けつから、呼んでこい」
つて言つたつおん。

さあ、隣の欲たかり爺じいだのみんな集まってきた、

「なににして、こんなに宝、手に入れた」

って、うんと聞かれたと。

じんつあんは、酒こも飲んだし、気分もいいから、

「こういふうにして、お地藏さんさ、豆こころがして食かせ

たらば、こんなに金、手に入った」

って、すっかり教えてしまったつうんだ。

隣の爺、欲たかりだから、

「おれも、なんぼしたってもらってこなくてわがんね」

って言い出したと。

そうして、朝暗いうちに、豆ここひとつ、ネズミ穴さ、ころ

ころと入れてやったと。いっしょけんめ穴掘って、ずうつと行っ

てみたと。

そしたら、やっぱり隣のじんつあんが言ったみたいに、大き

い原つばさ出たとやあ。はるか向こうにお地藏さんがいたんだ

と。

「お地藏さま、お地藏さま、ここさ豆来たべ」

お地藏さんは、だまっていたけど。

「なんぼしたって来たわけだな」

って言ったが、お地藏さん、返事しないけど。

「返事などしなくなたって、ごめんなしてもらっから」

って、膝かぶさ、

「どっこいしょ」

と、乗ったって。お地藏さん、

「痛い痛い痛い
痛で痛で痛でえ」

って言ったつもな。

「痛いでなんて言ったってわかんね。背中さまわってみっから」

って、背中さ上がったけ、お地藏さん、

「重おもて、重おもて」

って言ったと。

「重てなんて言ったって、がまんしてけろ」

って、首たさつかまったと。

「あつ、痛い、痛い」

って、お地藏さん、言ったつおん。

「そんなこと言ったって、高いところさ上がないと、見えな
いんだ」

って、隣のじんつあんから話を聞いてるから、どんどん首たま
さかじりついて見たつうんだ。

「ああ、隣のじんつあん語ったのあの家だな。あっちの方角さ
行けば、あの家さ行くんだな」

って、欲たかり爺、ひとりごと語って、急いでいったから、う
んと早く着いたとさわ。

「さて、どの辺さかくれたらいいかな。すぐに銭手に入れるた
めに遠くにかくれないほうがいいな」

って、戸棚の脇わきさびったとかくれていたつんだ。

暗くなるころ、

ほほ、ほほほー

って、にぎやかな音、はじまったと。

「ははあ、あの鬼どもだな、銭おいていったの」
って思ったと。

そうしているうちに、赤鬼と青鬼、やっぱり来たつけど。

「さあ、火たけ、火たけ」

って、けむり、ぶかぶかとぶかしたら、爺がかくれていたとこ
までけむってきたつうんだ。とつてもけむたかったけど、が
まんしてたづもな。

そのうちに、酒こ飲むことになったんだって。

さあ、爺、待っていられないから、

バタバタバター

と箕をたたいて、

コケコッコー

って、ニワトリの真似したと。したれば、鬼、どでんして（びっくりして）、

「今日は、火もたかないうちから、一番鶏、鳴いたどわやあ」
って言ったつも。

それから、爺、なんぼしたって、これ以上待っていられないから、わらわら、今度は二番鶏の真似して、また、

バタバタバター
と箕をたたいて、

コケコッコー
って、鳴いてみたっつうんだ。

したれば、鬼ども、
「こつたに早く夜明けはるはずがない。なんだかおかしいなや」
って言ったつも。

爺、三回目も箕をたたいて、

コケコッコー

って鳴いたと。したれば、

「こんなにニワトリ鳴いたのきいたことねえ。だれかいたんでないかや」

って、さがしたっつうんだ。

そうしているうちに、爺、かくれていたの見つけれられしまつたと。

「きのう銭いっぱいおいたの、どこさいったかと思つたれば、この野郎たがって（持ち運んで）いったんだな」

って、隣の爺、げんこつ、ごんごんもらつてしまつたづもな。
そうして、青くなって泣きながら家さ帰つてきたと。

隣の爺、さっぱり宝物、手にはいらなかつたんだってさ。

みやぎ民話の会叢書第七集

「小松仁三郎のむかし語り・はなし語り

どーびんさんすけ さるまなぐ」より

四 鼠と豆^{ねずみ}

むかし、おじんつあんとおばんつあんいたんだって。またちよつと離れて、おじんつあんとおばんつあんいて、となり同士で暮らしていたんだって、仲良くね。

で、あるとき、春先だなあ、豆まくころね。こつちのおじんつあんが、カゴに豆を持って、畑さ豆まきに行った。

ほすたら、一匹の鼠^{ねずみ}あらわれて、一粒ほろーつと落とした豆、くわえてった。

へごりゃ、ふしぎなもんだなあ

石さお尻ついて、豆転がしてやった。また、拾っていった。

何回やっても持っていくの。ほこにあるだけ転がして、みんな拾って穴^{へえ}さ入ったんだってね。

へふしぎなもんだなあ

って思ってたねえ。ほすてたつけ、鼠、穴から出はってきて、

「おじんつあん。いっぱい豆いただいて、どうもありがとうね。家で今晚いっぱいご馳走^{ちっせう}つくって、おじんつあんにお上げすつから、一緒においで」

っていうんだって。

「なんで、おれ、鼠のどご、穴^{へえ}に入行って行かっけやあ」
って、おじんつあん、いったって。

「大丈夫だから、わたしについて入^{へえ}ってける」

って。ほすて、入^{へえ}って行ったらね、まあ、奥は広くて、まあ、いろいろさまざまな宝物並べた部屋がいっぱいあるんだって。

へあらあ、鼠^{ねずみ}ってこんなに立派な部屋つくって暮らしてる。ふしぎなもんだなあ

と思ってたね、おじんつあん。

ほすて、ご馳走^{ちっせう}いっぱいいただいて、お酒飲ませらって、踊りおどる鼠、まず、こつちでは鉢巻きして餅搗きだって。

どっこい どっこい

今年あ 豊年満作で

猫の音 聞きたくねえ

こういう唄うたんだってね。

へなるほど、鼠だから猫来たら、みな取られる。これはほんとの唄だなあ

おじんつあん、こう思って、まず、いっぱいご馳走つつおになったんだって。

「さあ、そろそろ時間だ。おばんつあんも待ってっぺから、このへんでお暇まひらすっから」

つって、ほれ、いったつけ、鼠の一番偉いやつが、

「いま宝物上げっから、重い宝良いがすか。軽い宝良いがすか」

つっていったんだって。

「おれ、年寄りだから軽いのいいなあ」

つって、軽い宝物もらってきて、ほすて、朝方に帰けえってきたんだって。

家さ着いて、その箱開けたつけ、たいした宝物いっぱい入へえっていたんだってね。なんの宝物だか知らねえけっどね。

そすたら、となりのおじんつあん、垣根越しに、曲がって見たんだって。

「なんで、あんな宝物、どっからもらってきたんだ。だれにもらってきた」

朝そうそうに、ほら、聞きに來たんだって。

「おれはこつやつたつきゃ、鼠の家さ連れてかれて、そすて、えらいご馳走つつおなつて、ほうすて宝物もらってきたんだあ」

つて教えたんだって。

「ほつか。ほんでえ、おれさも教えろや。それ行くのはどこだか」と、こうなつたから、教えたんだって。

となりのおじんつあんも行って、豆転ばしてけたんだって。

やつぱす、鼠来て、ほら、

「今日は別なおじんつあんだけっども、いっぱい豆もらつたか

ら、どうもありがとう。また、ご馳走^{つっお}上げっから家さま来てくだ
さい」

っていわったから、よろこんでついて行ったんだって。

鼠のやつは、相変わらず餅搗いて、

どっこい どっこい

今年あ 豊年満作で

猫の音 聞きたくねえ

って、うたい出すんだって。

へこいつ、猫の真似したら、この部屋の宝物、みんな、おれ持っ

ていかれんだ

と、ごう思ったんだって。ほうすて、いゃんべに(いいあんばい)

になったら、

ニャオー ニャオー

って鳴き真似したのしゃ。

「そおらっ、猫来た」

鼠^{さか}、叫^{さか}んだっけ、真っ暗になつてね、どこが出口だか、どっ
から入^へってきたのか、わかんなくなつてしまつたんだって。ほ

んでもって宝物も見えねえんだって、あんなにあった宝物ね。

ほすて、そつちこつち探したっけ、手斧^{てきつな}つうのあつたんだっ

て。それで土掘つてね、

「このへん掘つたら、家の近くだべな」

って、いっしょけんめに掘つたんだとしゃ。

すたっけ、おばんつあん土間^{にわ}にいて、藁^{わら}打ちしてたんだって。

ちようどおばんつあんのお尻^{しつ}んどごを、ほれ、掘つて上がった

んだってしゃ。なんか、土、もっこもっこつていうもんだから、

おばんつあん、

「あらあ、おつかしいもんだなあ。こいつ、モグラの野郎か、

鼠の野郎か、ひとつやつつけっかな」

って、熱湯かけたんだと。うん、知らずにね。

「モグラの野郎、鼠の野郎、うまく死んだべなあ」

って掘って見たら、おじんつあんだったって、死んだのね。

だから、人が宝物持ってきたって、人真似するもんでねえんだからな、って教えられたの。

五 ネズミ浄土

むがし。

おじんつあんとおばんつあんあって、おじんつあんが団子好きだから豆粉（まめご）さ包んだり、あんこさ包んだりして、とにかく毎日のように団子持っていて、タバコ（農作業の合間にとる軽い食事）に食せでやんだと。

あるとき、団子食ってたれば、その足元にネズミ穴あって、小せえ子っこネズミっこ、ちよろちよろ出はってきて、おじんつあんが食ってるのを、顔、上げ下げして見てんだと。

「お前も食いでえが」

豆粉さ包んだ団子だったから、

「食ってみろや、ほれ」

って、一つやったれば、チュウ、チュウって叫んで、くちやくちやとしゃぶってから、そのあと穴の中さ、そいづ持って入ってし

まったど。

次の日になって、同じように団子食ってたら、今度あ、三匹の子っこネズミあ来て、顔、上げ下げしてる。

「なんだっけ、今日は三匹いたのか。お前だち、半分ずつして食しえっから」

ってやったれば、そいづ少し食ってから、あとみなネズミ穴さ持っていったど。

でえ、三日目になったら、今度あ、五、六匹の子っこネズミあらわれたんだと。

「どつても食しえ足でねっっちゃや。ほんでも、仕様ねえから、分けて食えやなあ」

って、箸でちぎって、みな食わせたんだと。

四日目になったら、今度あ、親ネズミ来たど。

「おじんつあん、おじんつあん。毎日、子どもだちさ団子食しえでもらって、うんと喜んで帰ってきたでば。おれ、餅ついてご

馳走すっから、あばいん（行きましよう）」

って語ったんだと。んでえ、

「どごにい、お前どごさ行くには、ネズミ穴さ入んねとわがんめえ。おれ、入られねっっちゃや」

って語ったら、

「おれ、手え引っぱっから、おら家まで行くにいい。あばいん。手えとつて引っぱるから、目えつむってらいん」

って。そして、ネズミに引っぱられ次第に行ったらば、どごをなじよに來たのが、わからねえげつつも、ネズミの家さ着いたど。

着いたれば、やつぱり餅つくふうで、セイロから湯気が、ほうほうと出でて、つくばりになつていたど。

「いま、餅ついてご馳走すっからね」

って語って、つきはじめたど。

ネズミっこどもは二匹してつく。一人は相取りして、かけ声かけんのに、

この里に、ネコさげいなけりや

おっかなぐねえ

って語って、ぼつ、ぼつ、ぼつと、つくんだと。何回も、そいづ、

この里に、ネコさげいなけりや

おっかなぐねえ

ぼつ ぼつ ぼつ

って。そして、つき上がったの、ご馳走つつおになったと。なににな

食かしえらったか、わがねえげつつも、とにかく食かしえらって、

「腹けえいっぺになったから、帰けえるわや」

って帰けえつどごしたら、手え引っぱって、

「お土産に、おら、落かちてた金拾かって、使かいかねるのあつから、

それをやっから」

って、お金もらったんだと。

親切よろこにしたおじんつあんは喜よんで、はあ、帰けえってきたんだと。

そして、そのお金、足しになって、よほど格好よくなったんだと。

そごき、隣のおばんつあんが火もらいに来たんだと。

「なんだべ。こつちで景気良いくなったようだが」

って聞きぐんで、いままでのことを話したと。

「ほんでえ、おれどごのじんつあまも、やんなくてわがねえ」

って、畑さやって、団子を持ってって、ネズミの来るの待つて

たれば、やっぱり来たから、団子食たわせたと。

三日食たわせて四日目が来た。じんつあまんどご、迎むげえにきた

んだと、親ネズミね。行ってみれば、やっぱりセイロから湯

気立たって、餅つくばりになってたんだと。

それから、縁側かさ、いっばい金干かしてらの、目についたんだと。

餅かよりなにより、その金欲かしくなつたと。

この里に、ネコさげいなけりや

おっかなぐねえ

ぼつ ぼつ ぼつ

ネズミたちが、つきはじめたれば、

「なに、餅^かなど食^かしえられなくなつていいから、さつぱと錢^{ぜに}持つていくべ」

つて、じんつあま、叫^{さか}んだと。

ゴロ ニヤーゴ

したれば、いままで明るかつたどご、ぽかつと明かりが消えたように暗くなつて、身動き出来なくなつてしまつたど。土、みな寄つてきてしまつて、餅も食わねえ、錢も、どごさいつたか、わけわがんなぐなつて、土かきわけ、かきわけ、モグラみでえに泥だらけんなつて、帰^{けえ}つてきたんだと。おばんつあんは、

「じんつあま、なんぼ金^{かね}持つて帰^{けえ}つてくんべ」

つて、へらで尻^{けつ}叩^{たた}いて待つていたが、まず、じんつあま、その格好だから、たまげてしまつたんだと。

だから、あまり欲^こ濃^こくするもんでねえどしゃ。

これで よんつこもんつこ さけだどしゃ

みやぎ民話の会叢書第十集

「登米郡南方町の民話 青島屋敷老翁夜話 上巻」より

六 一粒の豆っこ

むかあしむかし。

あつとこにね、ずんつあまとばんさまがいたんだと。

ある時、ずんつあまがね、庭掃ぎしてたんだって。そうしたら、

豆っこ一粒見つけたんだつおん。

「ばんさまや、ばんさま。豆っこ一粒見つけたげんとも、この豆っ

こ、なじよすんべなあ」

って聞いたんだと。

「みな豆粉にしたんでは、いだましいしすつから。ほだね、半

分は種つこに、半分は豆粉にすんべし」

って語つたと。

それから、ばんさまが、半分の豆つこをね、カラコ口、カラ

コ口と焙烙で炒つたんと。そいつを、こんどは、白さ入れて、

手杵で、スツトントン、スツトントンと搗いて、豆粉にした

んだと。

ほしたつけ、ふしぎなことに、搗けば搗くほどだんだん増え

て、たちまち一升になってしまったんだって。ところが、豆粉

をふるうころす（ふるい）持ってねがったんだとね。ばんつあ

まが、

「ずんつあま、おら家でころすねえんだけつども、なにでこの

豆粉おろす（豆をふるう）べや」

って言ったんだと。

「んだなあ、ほだらば、おれの禪の端つこでもおろしえつ

ちや」

って、ずんつあまの長え禪の端つこで、ばふらあーばふらあー

と、おろしたんだと。

そうして、その豆粉でね、豆粉だんごこっしえで（こしらえ

て）、ずんつあまとばんさまは、腹いっぺえ食つたんだと。夜

になって、

「残りの豆粉、どこさ置くべや」

えんつこもんつこ さげしたつと。

つうことになったつおね。

「戸棚さ置けばネズミに食れ^かつし、床さ置くとネコに食れ^かつし、

みやぎ民話の会叢書第九集

んだらば、おらだちの寝る間^{あいだ}こさでも置くべやあ」

『母の昔話』を語り継ぐ — 登米郡迫町新田の民話 —

つうことになったんだと。

より

ところが、夜中にね、ずんつあまが、ボオーンと大きな屁^{おっ}、

たれてしまったんだと。

そしたつけ、その豆粉、さつぱと吹っ飛んで、ばんさまのへ^{けっつ}そから尻^{けっつ}から、みんなくつついてしまったんだと。ほしたら、

じんつあまがね、

あつたらもんだなあ ペタ ペタ ペタ

あつたらもんだなあ ペタ ペタ ペタ

つて、みんな、舐^なめたどつしや。

七 豆つこ話

むがあす。

あるとごろに、じんつあまとばんさまあつたど。

ある時、^{せい}じんつあまが庭掃いたつけ、豆つこ一粒ころがってきたつつもや。ほんで、その豆つこば拾って、

「ばんさまや、ばんさま、この豆つこなじよにする」

つて語つたど。^{かだ}ばんさま、

「半分が種で、^{はつ}半分が豆粉にすべえ」

つて語つたんだど。^{かだ}

んで、半分はしまっておいて、半分の豆を焙烙で^{ほうろく}からつこ、

からつこ炒つたんだど。そして、白でとつことん、とつことん、

とつことんと搗いたど。

ところが、その豆つこ、おろす(ふるつ)のがねがったつおん。

「ばんさまや、なじよにして豆粉におろすべや」

「んで、じんつあまのふんどす外して、おろすべや」

じんつあまのふんどすの端つこ^{はす}でくつつ、くつつ、くつつ、くつつ、おろすたど。

さあ、豆粉出来上がったど。

「ばんさまや、この豆粉どごさ置くべなあ」

「上さ置けばねずみに食^かれつす、下さ置けば犬あ来^くつす、棚さ置けば猫来^くつす。どごさも置くどごねえつちやなあ」

つて語つたんだど。^{かだ}そして、ばんさま、

「なあに、おれどじんつあまの寝る間^{ええだ}つこさ置くべ」

そこで、じんつあまとばんさまがあど^{あど}つぎ(一枚の布団に頭を反対側にして互い違いに寝ること)して寝でだ間^{ええだ}つこさ、置

いだど。

そしたら、夜中にじんつあま、大きい^{おっ}屁、ぼおんと放^ひだつ

つおんやあ。したつけ、その豆粉飛んでつて、ばんさまの種つ

こ(女性器)さくつつがったどや。

んで、じんつあま、

「ああ、もってえねえ」

って語^{かた}って、なめて取ってけだつなあ。ぺた、ぺた、ぺたあど。

えんつこ もっこ さげだ

昔話の一番はじめに語るのがこの話なんだよ。

みやぎ民話の会叢書第十一集

「栗駒町猿飛来の伝承 榎原村男翁の唄と語り」より

八 豆っこないでばやあ

むかーし、あつたづでや。

じんつあんとばんつあんとふたりで暮らしていたんだと。あんまり仲いいから、ひとつ布団^{ふとん}さくぐって、いつも寝ていたつんだ。

お正月来るっていうので、じんつあんとばんつあん、豆粉^{まめこ}つくることにしたんだと。えらく大きな豆^{おっ}ひとつ、半分にわって、半分は種豆だからって、こっちさとしておいたと。半分は豆粉にして神さまをお供^{そな}えしなくてわかんねって、ふたりで、午前中かかって、グルグル、グルグルと石臼で豆粉つくったとしゃ。さて、夜になって、神さまにお供^{そな}えしてのこった豆粉、なじよしてしまっておくべとなったと。

したら、じんつあんが、

「ほだなあ、上さあげておけっちや、火棚^{ひだな}の上さ」

って言ったと。したら、ばんつあんが、

「だめだ。火棚の上さあげっと、ネズミに食かれっから」

って言ったつうんだ。

「したら、下さおけっちゃや、かごかぶせて」

って言ったれば、

「ネコに持っていかれっぺや」

って言ったつもなあ。

ばんつあん、どこさもおくとこなかったんだって。

じんつあんが、

「ほで、婆はばや。ネズミにもネコにもとらんねように、ふたりの

背中のまん中さ豆粉おいて、寝べっちゃや」

って言ったと。したら、ばんつあんが、

「爺じい、屁ちばりたっつから、豆粉ふっ飛んでいくとわかんねから、

背中向けらんねべ」

って言ったつも。

「ほんで、腹はら合わせして寝っから」

って、むかい合っつて寝ることになったんだって。

夜中になると、じんつあん、いつもの気持ちで、豆粉おいた

の忘れて、えらい屁ちたっつてしまったつうんだ。ばんつあん、

「屁ちばりたっつて困ったなあ。豆粉、屁ちくさくなっつたべなや」

って言ったと。

つぎの朝になっつたれば、

「豆粉ないでばやあ。爺じい、屁ちばりたるから、ふっ飛んでいっつ

んだべ」

ってなっつたと。

じんつあん、布団開けて見たれば、どこさふっ飛んでいっつた

のか、豆粉ないんだと。

「おかしいこっつたな」

つてさがしてみたれば、ばんつあんの大事などごさくつついて

いたっけど。

したれば、ばんつあん、

「いたましいなあ」

って言うんだなあ。

しかたがないから、じんつあん、みんななめてしまったと。

そこで、ばんつあんは、さっぱりなめないで終わってしまった

たんだと。

みやぎ民話の会叢書第七集

「小松仁三郎のむかし語り・はなし語り」

どーびんさんすけ さるまなぐ「より

メモ欄としてご自由にお使い下さい

メモ欄としてご自由にお使い下さい

一民話 声の図書室プロジェクト DVDのご紹介一

「民話声の図書室プロジェクト」とは、「みやぎ民話の会」が約45年にわたって記録してきた、宮城県を中心とする民話語りの映像・音声を、せんだいメディアテークと協働し、だれもが活かせる共有財産として、未来へ受け渡していこうとする活動です。これまでに、9名の伝承の語り手による民話語りのDVDが24タイトル完成しています。

「さらに色々な語り手さんの語りを聞いてみたい」と興味が湧いた方は、せんだいメディアテーク2f映像・音響ライブラリーで配架中の、「民話声の図書室プロジェクトDVD」を、ぜひご利用ください（閲覧・貸出が可能です）。土地の声で語られる民話に、耳をすませてみませんか？

《「豆粉の話」が収録されているDVDタイトル》



『登米市迫町の伊藤正子の語り [2]』
「豆っこと地蔵さま」、「一粒の豆っこ」、「ネズミの餅搗き」



『登米市南方町の永浦誠喜の語り [1]』
「一粒の豆」、「豆と地蔵さま 一地蔵浄土ー」

● これまでに制作したDVDのタイトル一覧 ●

- 登米市南方町の永浦誠喜の語り [1]-[3]
- 栗原市一迫町の佐藤玲子の語り [1]-[2]
- 遠野市宮守町の佐々木 健の語り [1]-[2]
- 登米市迫町の伊藤正子の語り [1]-[3]
- 黒川郡大和町の曾根つき子の語り [1]-[4]
- 伊具郡丸森町の佐藤秀夫・松崎せつ子の語り [1]-[3]
- 伊具郡丸森町の佐藤秀夫の語り [1]
- 亘理郡山元町の庄司アイの語り [1]-[4]
- 加美郡加美町の引地田路子の語り [1]-[2]